

TOGARIISHI SITE

特別史跡

尖石遺跡

—— 平成10年度記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書 ——

1999年3月

茅野市教育委員会

TOGARIISHI SITE

特別史跡

尖石遺跡

— 平成10年度記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書 —

1999年3月

茅野市教育委員会

はじめに

茅野市には300以上もの遺跡が発見されていますが、その多くが縄文時代の中でも中期と呼ばれる時期のものです。それらの遺跡の多くは八ヶ岳山麓の中でも標高1,000m前後に位置しており、その代表的な遺跡が国の特別史跡に指定されている豊平地区の尖石遺跡です。

永年、地権者の皆さんや地元の人々の理解と熱意によって、保存されてきましたが、近年の開発はついに尖石遺跡の周辺にも及んできました。そこで茅野市では、このすばらしい郷土の文化遺産を保存し、後世に受け継ぐべく昭和62年度から国・県のご援助をいただき、尖石遺跡の公有地化を行い、平成2年度からは引き続き記念物保存修理事業（環境整備）に着手しました。

記念物保存修理事業（環境整備）の一環として行われている試掘調査は、尖石遺跡の整備計画を作成していく上での基礎的な調査として実施されているものであります。

その試掘調査も昨年1年間の休止はありましたが、今回で8回目となりました。これまで古くから尖石遺跡と呼ばれていた地区的調査を行ってきましたが、今回は新たに国の特別史跡に追加指定された、従来与助尾根遺跡と呼ばれていた地区的調査を行いました。

与助尾根地区は、永年尖石遺跡を調査されてきた宮坂英式氏が、戦後間もなく縄文集落の解明のため、多くの協力者を得て、地元の中・高校生らを指導しながら調査をした遺跡です。この与助尾根地区には戦後初めての復元家屋が建設され、史跡公園として整備されてきましたが、隣接する地にある尖石考古館の新築にあわせ、再整備を行うことになりました。

そこで、遺跡の再整備にあわせ、与助尾根地区的遺構が今までに発見されたものだけなのか、他にあるとすれば、それがどのような分布を示しているのか、また、集落の形は今まで考えられていたように、尾根に沿って一列に並んでいるのかといった疑問を解明するため、今回試掘調査を行うことになりました。

この試掘調査と並行して行われている史跡整備は前述のように、新尖石考古館の開館にあわせて整備実施計画が進んでいます。今後も史跡整備に一層の努力をして参る所存でありますので、皆様の一層のご協力をお願いします。

最後に、この事業の実施にあたってご指導いただいた文化庁、長野県教育委員会をはじめ、調査に参加された関係者の皆様に対し、深甚なる感謝を申し上げます。

平成11年3月

茅野市教育委員会
教育長 両角 源美

例言・凡例

1. 本書は、特別史跡尖石石器時代遺跡記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書である。
2. 試掘調査は、国庫及び県費の補助を受け、茅野市教育委員会が実施した。
3. 試掘調査は、平成10年9月17日から12月25日まで行った。
整理作業は、平成10年12月14日から平成11年3月25日まで行った。
4. 出土品の整理及び報告書の作成は、文化財整理室で実施した。
本報告書に係る出土品・諸記録は、現在建設中の新尖石考古館に保管する予定である。
5. 本報告書の執筆は、小林深志が行った。
6. 今回調査した地区は、從来与助尾根遺跡と呼称していたが、平成5年に尖石遺跡として国の特別史跡に追加指定されたこともあり、ここを尖石遺跡与助尾根地区として呼称することにした。また從来から尖石遺跡としていた地区については尖石地区、与助尾根地区と尖石地区の間にある湧水の流れる箇所については谷部と呼称する。
7. 調査の体制

本調査は茅野市教育委員会が実施した。組織は以下の通りである。

特別史跡尖石石器時代遺跡整備委員会

- 特別委員 田中哲雄（文化庁文化財保護部記念物課主任文化財調査官）
坪井清足（大阪府文化財調査研究センター理事長）
- 専門委員 戸沢充則（明治大学学長）
亀山 章（東京農工大学教授）
土田勝義（信州大学教授）
清水 勝（東京工芸大学教授）
小平 学（学識経験者）
宮坂光昭（長野県遺跡調査指導委員）
小松貞年（長野県教育委員会事務局文化財保護課課長）
- 調査主体者 両角徹郎（教育長）（平成10年5月10日まで）
両角源美（教育長）（平成10年7月31日より）
- 事務局 宮下安雄（教育次長）
文化財課 矢崎秀一（課長） 鶴岡幸雄（係長） 守矢昌文 小林深志（兼） 大谷勝己
小池岳史 功刀 司（兼） 百瀬一郎 小林健治 柳川英司 大月三千代
- 尖石考古館 浜 篤（館長） 竹村 哲（館長補佐） 小林深志 功刀 司 両角和恵 小平美智子
- 調査担当 小林深志（尖石考古館学芸員）
- 調査補助員 赤堀 彩子 小松とよみ 五味一郎 原 敏江 矢崎つな子
- 発掘調査・整理作業協力者
牛山市弥 牛山春雄 太田義明 小平千恵子 小平長茂 小平ツギ 小平フサ子
小平美智子 小平ヤエコ 小林美智子 武田ケサ子 立岩貴江子 野沢ミサ子 宮坂 勇
柳沢 宏 柳沢友治

目 次

はじめに

茅野市教育委員会 教育長 両角源美

例 言

目 次

第1章 調査の目的..... 1

第2章 調査の方法と経過..... 1

　第1節 調査の方法..... 1

　第2節 調査の経過..... 1

第3章 遺構と遺物..... 2

第4章 ま と め..... 22

図 版

抄 錄

第1章 調査の目的

茅野市教育委員会では、平成2年度から国庫及び県費の補助を受け、尖石遺跡整備のための事前の遺構確認調査を実施してきた。今回調査を行ったのは、平成5年度に追加指定された、従来与助尾根遺跡と呼称されていた地区である。その与助尾根地区は、戦後間もない昭和21年から数年間にわたり宮坂英一氏を中心に調査が行われ、繩文時代中期後半の住居址28軒の発見と調査を行った。その調査は台地のほぼ全体に及んだことから、その成果は繩文集落の初めての完全発掘として大きな評価を得た。また、発掘調査した住居址の上に建設された堀口捨己博士の設計による復元家屋は、日本で初めての復元として、その後日本各地に作られた復元家屋のモデルともなった。この復元家屋は何回も建設と修理を繰り返しながら、今日まで繩文の森の中にたたずむ繩文集落の風景として訪れる人々に親しまれ、また、様々な書籍に紹介されている。

その与助尾根地区を平成12年の新尖石考古館の開館にあわせ、再整備することになった。これにあわせ、従来遺跡のほぼ全域を調査したとされる台地を再調査し、住居址などの遺構の有無を確認することにした。また、昭和20年代に調査し、そのまま自然堆積するままにまかせてある住居址の埋没状態を調査するとともに、史跡公園の園路として削平されている箇所の原地形を推測し、史跡整備の際の設計に役立てる目的を持って一部トレンチ調査を行った。

第2章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

調査区の名称については、尖石遺跡の試掘調査に入る際に1から4区（従来アラビア数字）までの名称を付けて呼称していたが、今回の調査範囲が従来与助尾根遺跡と呼称されていた遺跡で、平成5年に新たに尖石遺跡の一部として追加指定された地区であり、その範囲から外れるため、新たにV区の名称を用いることにする。その中で北西隅を原点とし、10m四方の大きなグリッドを設定し、西から東へ向かってAから付し、北から南へ向かって1から付けていくこと、さらにその中を2m四方の小さなグリッドで細分し、それぞれ西から東へabcde、北から南へ12345と付すことなどは従来通りの方法を採った。

第2節 調査の経過

9月17日から委託業務による杭打ち作業を開始する。作業員は9月21日から入るが、杭打ち作業が繁茂する草に阻まれすべて終了していなかったため、草刈り作業を行う。

グリッドの掘り下げに入ったのは9月25日からである。調査予定範囲の一部が尖石考古館の行事に使用する予定であったため、北西部のV区L5e1のラインから調査に入ることにする。終了次第、統けてV区K5e1、J5e1、I5e1のラインというように、西へと掘り下げを行っていく。遺物は予想に反して少なく、各グリッドに数点の土器の小破片が見られる程度で、遺構の検出もなく淡々と作業が終了していく。

10月に入り、V区H4e1のラインの掘り下げに入る。H5e1の掘り下げに入り、ようやく土器片が多数出土するようになる。住居址になるのではないかと考え、徐々に掘り下げていくが、分からぬままローム面に至る。

10月19日には北西部の掘り下げを終り、南西部のニセアカシアの中木の生えていた箇所を掘り下げる。与

助尾根遺跡の最西端に位置する場所で、遺構の検出もなく、遺物の出土も少ない。

V区D1e1の礫出土状態の写真撮影を行う。礫の中には焼けて赤化しているものも見られるが、小礫が多く出土していることから、人為的な集石とは言えないのではないかと思われる。

南側の調査は宮坂英氏がかつて掘っていない一筆に入る。遺物の出土は北側よりあるが、量は少ない。遺構の検出を目指して、V区I6b4とI7c3の2グリッドを新たに設定し掘り下げを開始する。

南側の調査では、I7e4で石圓炉址を検出する。他のグリッドからも柱穴らしい遺構が検出され始め、ようやく遺跡の発掘調査らしくなってきた。この地区は遺構の検出される可能性が高いことから、新たにグリッドを設けて掘り下げる。

11月20日からは宮坂氏が調査をしてそのままとなっている23号住居址と園路を挟んだ26号住居址にかけてと、19号住居址について、同じ様に園路にかかるようにトレンチを設定し、掘り下げを開始する。すると、19号住居址の北西に新たな住居址が検出され、さらに掘り下げるごとに石圓炉が検出された。住居やその中の周溝、柱穴の覆土の状態を観察しても、発掘調査を行った形跡はなく、新しく検出された住居址である可能性が高まった。

12月1日には宮坂英氏と共に与助尾根遺跡の発掘調査に携わっていた林賢氏に来跡して頂き、当時の調査方法等を何うことができた。それによると、南側斜面の住居址の発掘調査はボーリングステッキで炉址を探して中央から広げる方法を取っているので、周辺にはまだ未掘の住居址の存在する可能性が充分にあること、今回発見した南側斜面の住居址はすべて未発見の住居址であることを確認する。また、I7e1で検出した炉址は、昭和10年に宮坂氏が牛尾来作氏と共に最初に発見した炉址である可能性があることなどを確認する。さらに、尾根の中央を東西に走る道沿いについても、未発掘であることを確認する。そこで、すでに調査してある南側の住居址の周辺にも新たにグリッドを設け、遺構の検出を計ることにする。

発掘調査は12月11日までに掘り下げと図面作成を終了した。それまでに史跡公園のために植林してある部分の埋め戻しも併せて人力で行っていたが、それ以外の部分については埋め戻し工事として外部委託し、重機により行った。その重機による埋め戻し工事も12月25日までに終了し、現地でのすべての作業を終わった。

第3章 遺構と遺物

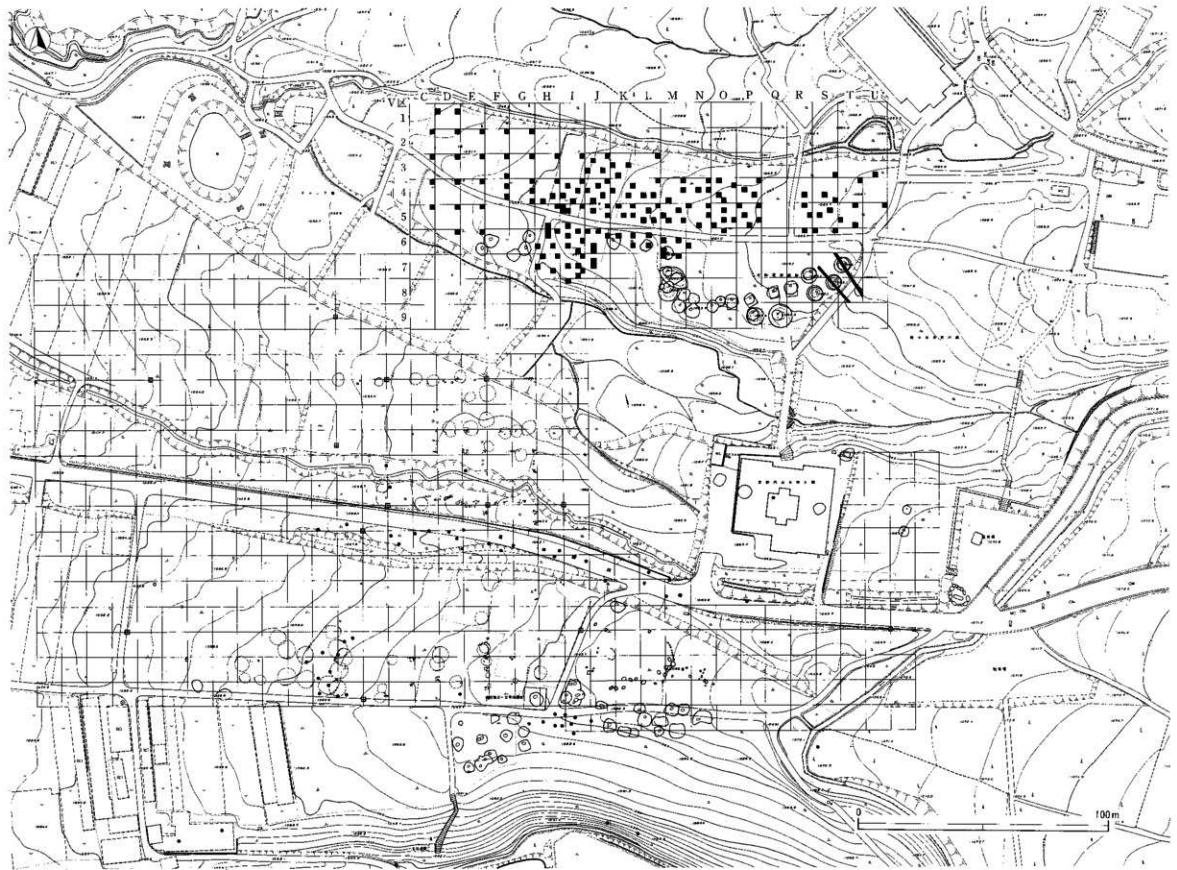
今回検出・確認した遺構は住居址、土坑・小豎穴など82基である。従来の試掘調査では小豎穴の名称は用いていないが、調査区の関係で住居址になるものか土坑になるものかが判ぜんとしないものについてこの名称を用いた。

遺構1（第3図、図版2-1）

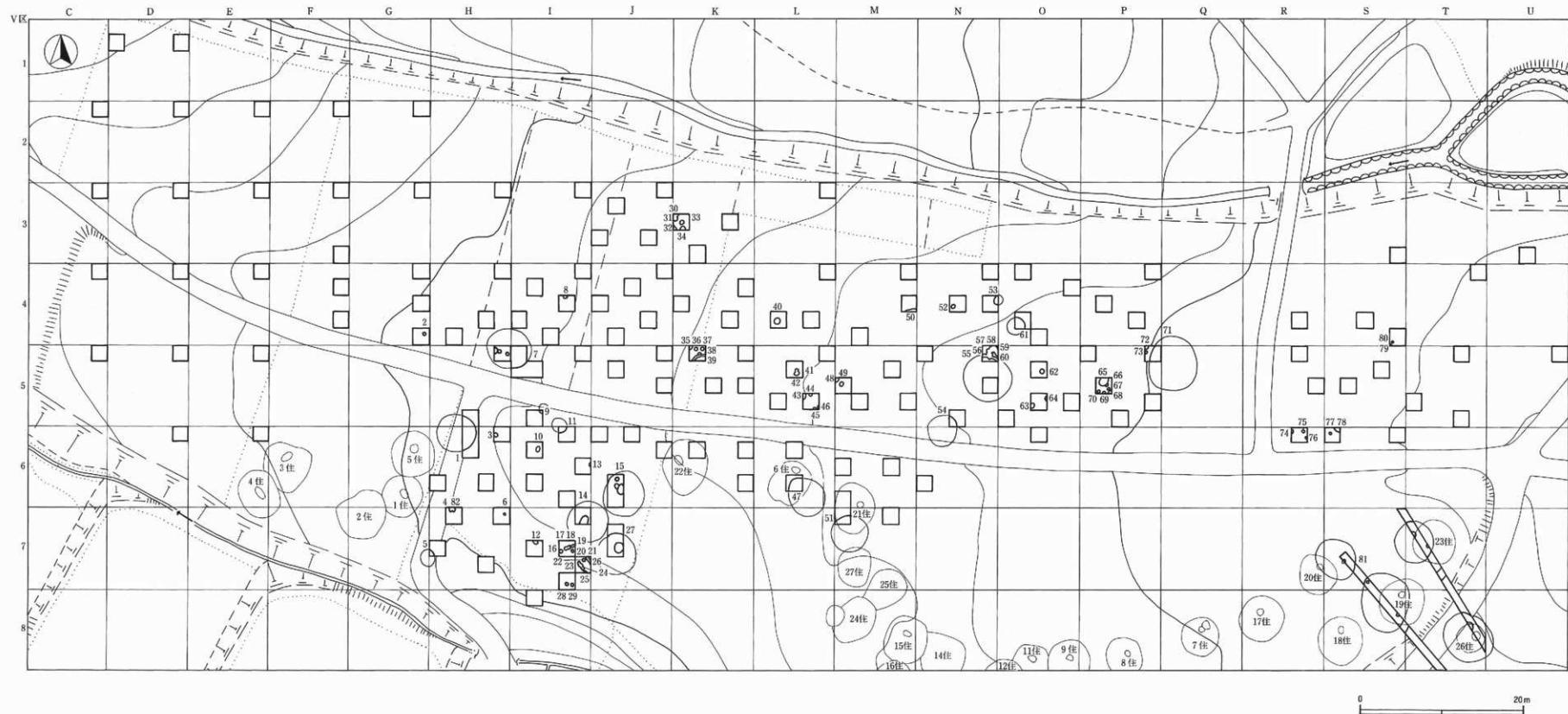
V区H5c5、H6c1・2で検出された。当初H6c2で検出された遺構が、住居址になるか土坑になるか判ぜんとしなかったため、新たにH5c5を新設し、さらに中間のH6c1を掘り下げ、未発掘の住居址であることを確認した。径が約5mの円形の住居址の東側を検出したことになる。確認面での覆土は黒褐色で炭化物粒子を含む。

遺物は土器片が130片ほど出土している他、凹石が1点出土している。しかし、遺構確認面で掘り下げを終了したため、確実に遺構に伴うと考えられる遺物を特定できなかった。出土土器の時期は中期後半の曾利II～IVの小破片である（第5図5～11）。

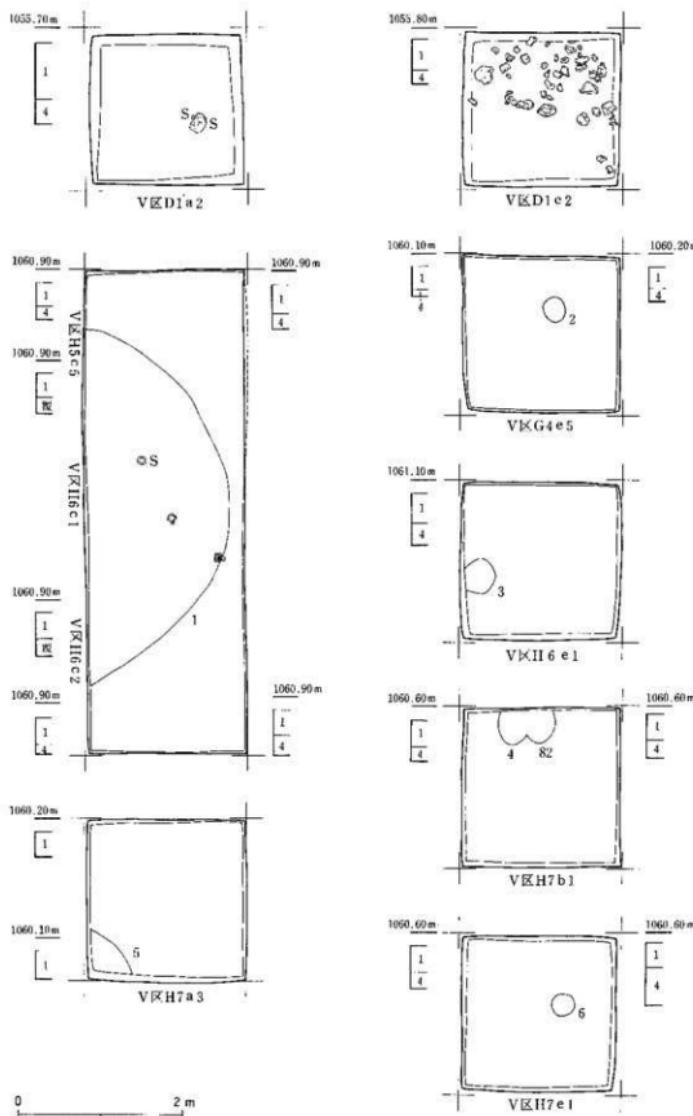
遺構2（第3図）



第1図 周辺の地形と発掘区 (1/1,500)



第2図 発掘区と遺構の分布 (1/400)



第3図 挖出された遺構と土層堆積状態(1) (1/60)

V区G 4 e 5で検出された。径25~30cmの柱穴状の遺構である。グリッド内からは2点の縄文土器が出土しているが、遺構に伴うとは考えられない。

遺構3（第3図）

V区H 6 e 1で検出された。西壁が確認できていないが、径40cm程の円形の柱穴状の遺構になるものと考えられる。同じグリッド内からは遺物の出土はなく、時期は不明である。

遺構4・82（第3図）

北側が検出されておらず、平面形態を明らかにすることはできなかったが、南側がくびれているため、2つの柱穴状の遺構が重複しているのではないかと考えられる。

遺構5（第3図）

V区H 7 a 3に位置する。遺跡の平坦面から南の谷部にかかる地形変換点付近にある。黒褐色上の覆土をもつ。グリッド内からは、縄文土器片や黒曜石片が出土しているが、確実に遺構に伴うと考えられる遺物は、確認面の段階では出土していない。現状では住居址になるものか土坑になるかは判ぜんとしないが、北坑としてもかなり規模は大きくなると考えられる。

遺構6（第3図）

V区H 7 e 1に位置する。径が30cm以下の小さな柱穴状の遺構である。

遺構7（第4図、図版2-2）

V区H 5 e 1、I 5 a 1・2に位置する。当初H 5 e 1を掘り下げた段階で、周辺のグリッドに比して遺物の量が際立って多く、遺構の可能性が高いと思われたが、土器の小破片が出土するばかりで、ローム面に至った。そのローム面も住居址の床面という感じではなく、徐々に変化していく自然堆積の様相を呈していたため、しばらくそのままにしていたが、周辺のグリッドを掘り下げた結果、ローム面のレベルがかなり違うことが明かとなったので、隣接するI 5 a 1・2、I 5 b 2を新たに掘り下げ、遺構の平面形態や規模を明かにすることにした。その結果、I 5 a 1を中心に一括土器を含む、多量の土器片が出土し、住居址であることが明かとなった。

住居址は、径5~5.5mの円形を呈するものと考えられる。既に床面まで達していると考えられるH 5 e 1を除き、上層の投げ込まれたと考えられる土器の一部を回収しただけで床面まで掘り下げることは行わなかつた。出土した遺物は曾利II~IIIにかけての遺物が多いが（第5図12~19、第6図）、本址の時期は、最も大きな一括土器26の曾利IIの時期にあたるのではないかと思われる。

遺構8（第4図）

V区I 4 d 3の北壁際に位置する。径45cm程の円形の柱穴状の遺構になるものと思われる。

遺構9（第4図）

V区I 5 b 5の北東隅で検出された。ちょうど尾根の中央を東西に走る道のため、平面形態や規模は明らかにできていないが、I 5 b 2でこの遺構の痕跡がまったくみられないことから住居址の様な大きな遺構にはならないものと思われる。

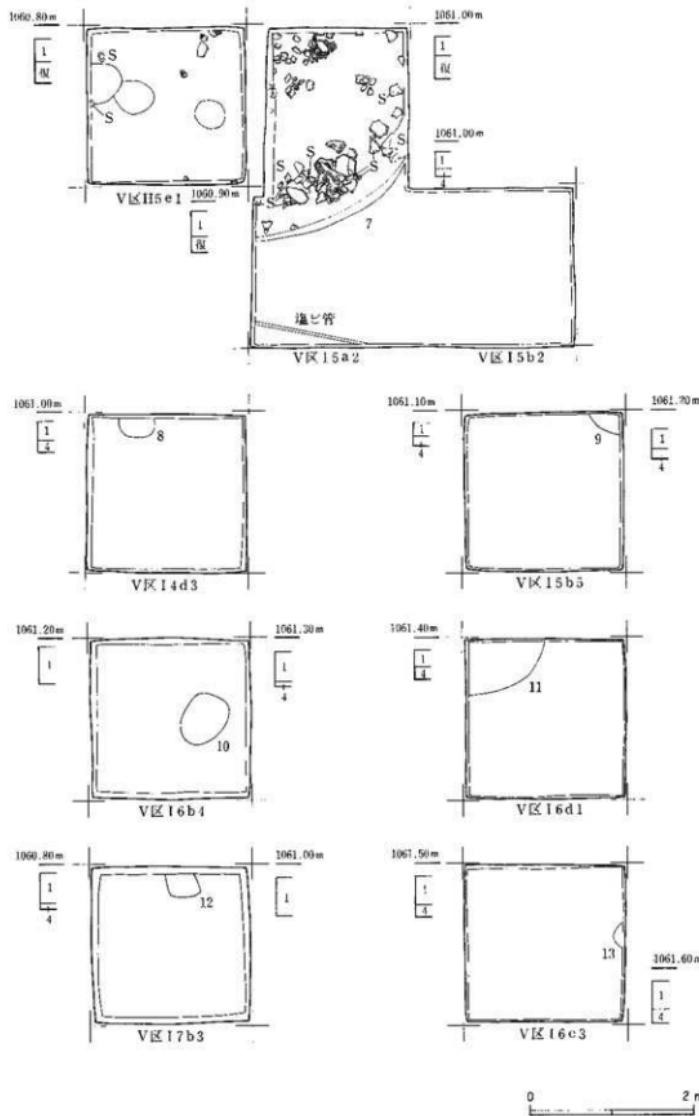
遺構10（第4図）

V区I 6 b 2 Iに位置する。径52~66cmの楕円形を呈する土坑状の遺構である。

遺構11（第4図）

V区I 6 d 1の北西隅で確認されている。覆土は黒褐色を呈する。近接するI 5 b 5でこの遺構の痕跡がまったくみられないことから、住居址とはならず、土坑になるものと考えられる。

遺構12（第4図）



第4図 検出された灌漑と土層堆積状態(2) (1/60)

V区I7b3の北壁際で検出された。径540cm程の隅丸方形を呈する柱穴状の遺構になると思われる。

遺構13（第4図）

V区I5e1の東壁際で位置する。平面形態や規模は明らかでないが、確認できたプランの湾曲からは、それほど大きくなっている柱穴状の遺構であると考えられる。

遺構14（第7図、図版2-3）

V区I7e1で南北に長く石を並べた石圍炉が検出された。検出された石围炉は、昭和10年に宮坂英太氏が牛尾来作氏と共に発見したものと考えられる。しかし、当時の記録によると、地表下80cmの所に検出されたとあるが、耕作により土を斜面の低い方に持っていく平らにしたのか、30cmほどで床面となってしまう。また、近接するI6d5、I7d3、J6b5、J7b2を掘り下げたが、本遺構の床面と同じレベルまで表土層（耕作土層）が達しており、遺構の形態や規模を明らかにすることはできなかった。

遺物は、ほとんどが埋め戻した際に紛れこんだと考えられ（第5図1～4）、時期にもばらつきがある。他に、床面から打製石斧が1点出土している。

遺構15（第7図、図版3-1）

V区J6b4・5に位置する。当初J6b4について掘り下げを行ったところ、北西隅にローム層が検出されただけで、他は黒褐色土層を呈していた。そこで、住居址などの遺構がある可能性があると考え、南に隣接するJ6b5を続けて掘り下げることにした。検出された遺構は、住居址であることは明らかになったものの、表土層の除去の段階では遺物の量も少なく、遺構の時期が不明であったので、続けて覆土を掘り下げることにした。

住居址の掘り込みは、J7b2にまでは至っていないことから径6m以内、恐らく5m前後の円形のプランを呈するものと考えられる。壁際に周溝、グリッドの西側に礫の抜き取られた炉址と思われる落ち込み、さらに周溝と炉址の間に柱穴かと思われる掘り込みも検出されたが、掘り下げは行っていない。

遺物は、繩文土器片（第9図28～36）や黒曜石片が出土したが、量は少ない。時期は曾利II頃であろうか。床面上には炉石に使われていたのではないかと考えられる礫などが散乱していたが、取り上げることなくそのまま埋め戻した。

遺構16～18、20（第7図）

V区I7d3に位置する。いずれも柱穴状の遺構になると思われる。

遺構19（第7図）

V区I7d3に位置する。幅20cm程の溝状遺構で、東壁際で折れ曲がる。遺構18と重複する。I7e4で検出された遺構26と連絡して、住居址の周溝になるかとも考えられたが、未確認である。

遺構21～25（第7図）

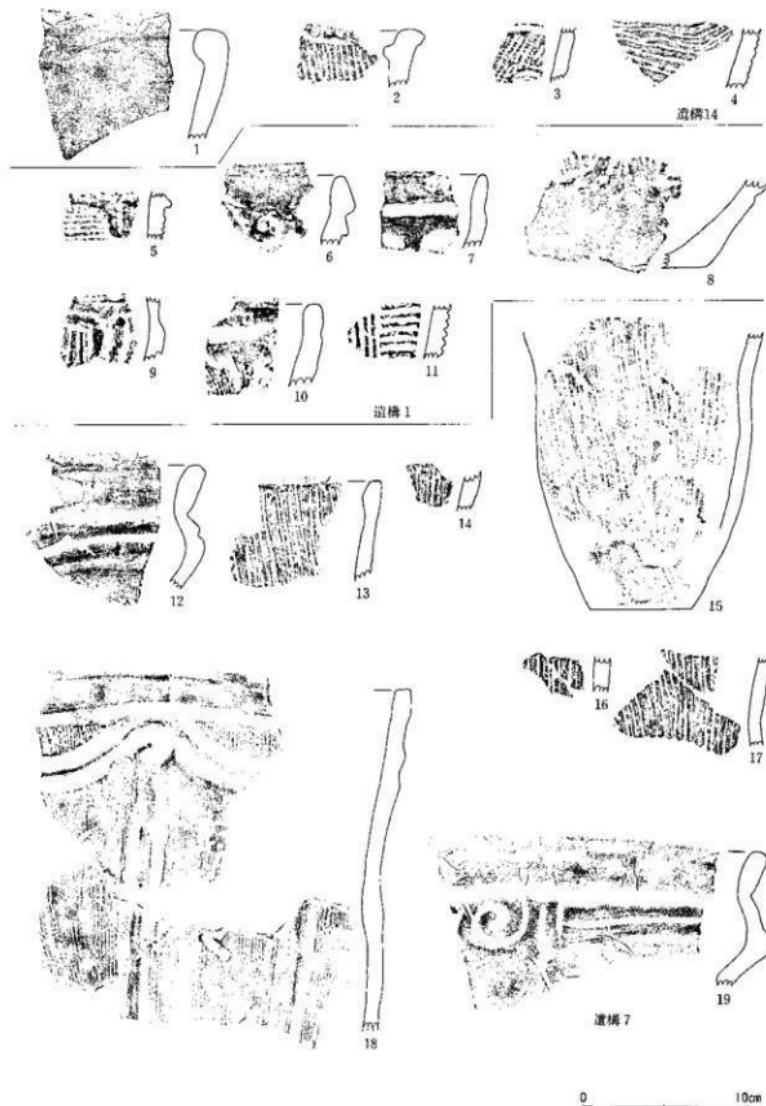
V区I7e4に位置する。いずれも柱穴状の遺構になると思われる。

遺構26（第7図）

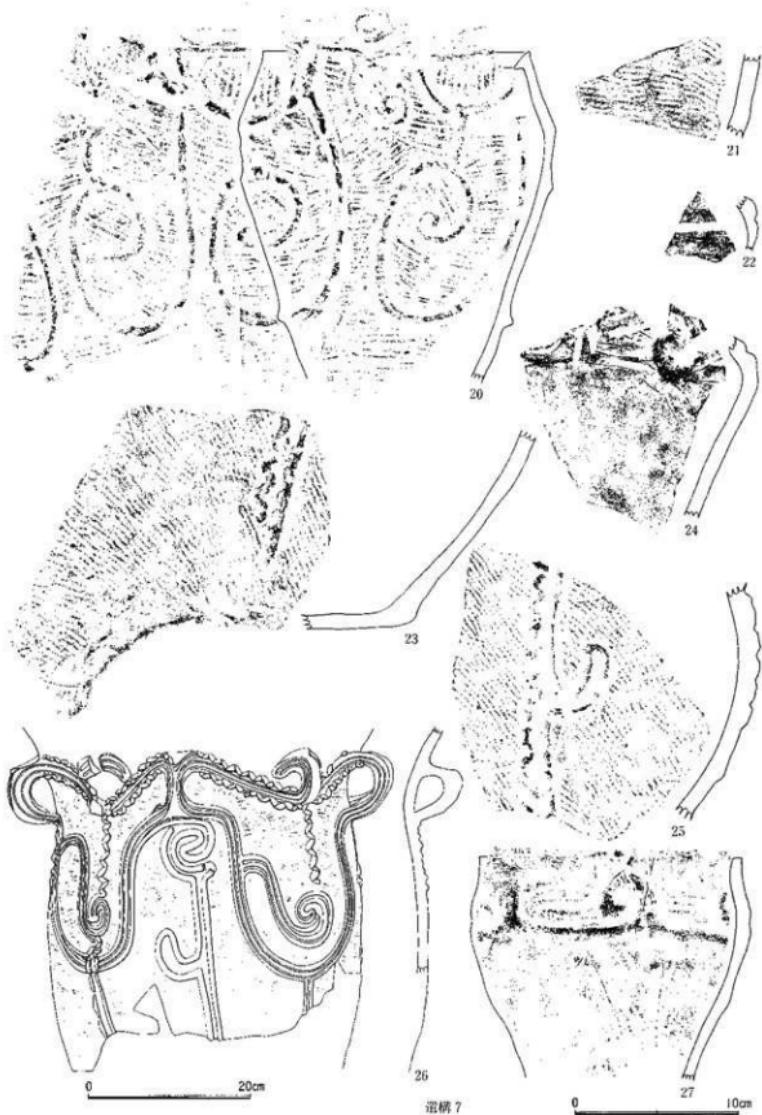
V区I7e4の東壁際で検出された、幅10～15cm程の溝状遺構である。

遺構27（第7図、図版3-2）

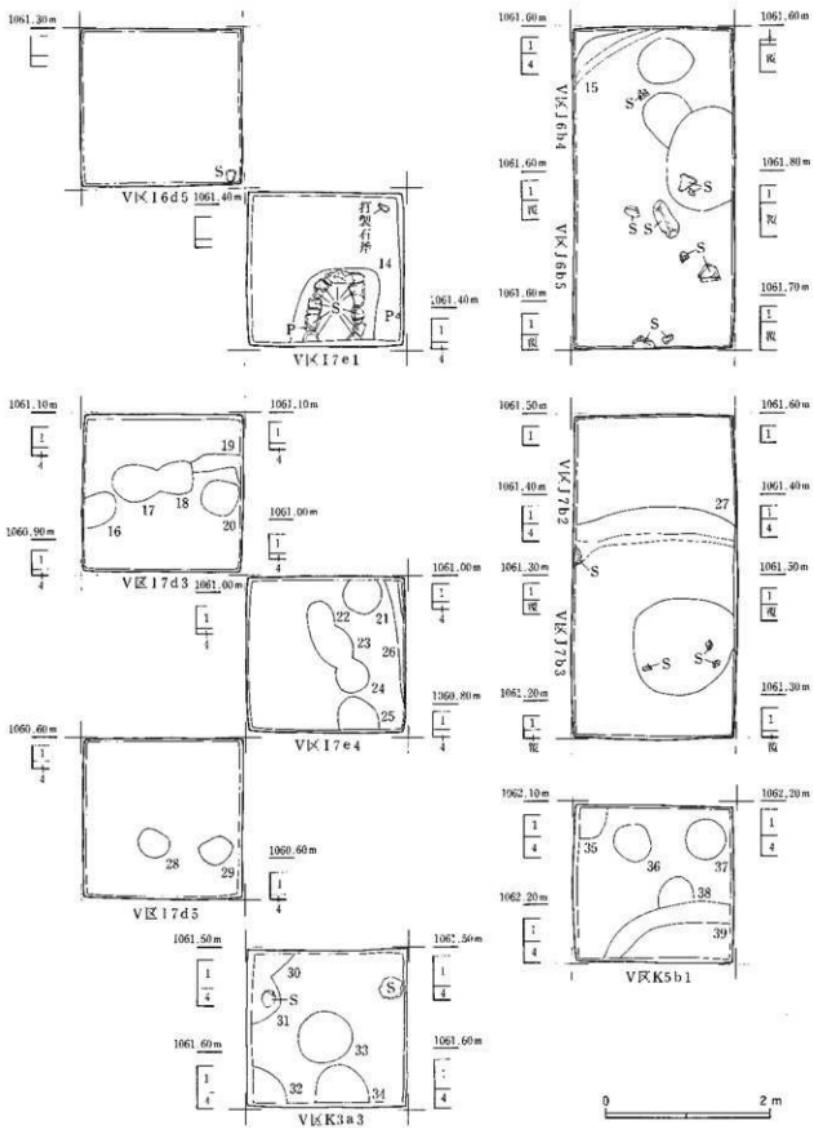
V区J7b2・3に位置する。最初J7b2を掘り下げたところ、南側に落ち込みが検出された。しかし、斜面の傾斜が大きくなっているだけという可能性もあったため、南側のJ7b3を続けて掘り下げ、遺構であることを確認することにした。掘り下げの結果、南壁までは検出できなかったが、径5m程の円形の住居址になつた。遺構の時期を明らかにするため、その住居址を床面まで掘り下げたが、黒褐色の覆土内から出土す



第5圖 出土土器(I) (1/3)



第6図 出土土器(2) (1/3 : 26#1/6)



第7図 検出された遺構と上層堆積状態(3) (1/60)

る土器は破片ばかりで、一括となるものはなかった。出土した土器の時期は、曾利II～IIIにあたる（第9図37～47）。土器片の他に黒曜石製の石鏡2点が出土している。

床面まで掘り下げた結果、壁際に周溝が、北壁から70cm程離れたところから礫が抜かれたと考えられる炉址の掘り込みが検出されたが、掘り下げは行わなかった。

遺構28（第7図）

V区I7d5に位置する。径33～40cmの柱穴状の遺構である。

遺構29（第7図）

V区I7d5に位置する。径33～36cmの柱穴状の遺構である。

遺構30・31（第7図）

V区K3a3の北西隅に位置する。括れがあり2基の遺構の重複であると考えられる。どちらの遺構も平面形態や規模は明らかでない。遺構31の確認面で熱を受けて赤化した礫が出土している。

遺構32（第7図）

V区K3a3の南西隅に位置する。平面規模や形態は明らかでない。

遺構33（第7図）

V区K3a3の中央に位置する。径62～68cmのほぼ円形を呈する土坑状の遺構である。

遺構34（第7図）

V区K3a3の南壁際に位置する。平面形態や規模は明らかでないが、径60cm前後の土坑状の遺構になるものと考えられる。

遺構35（第7図）

V区K5b1の北西隅に位置する。平面形態や規模は明らかでない。

遺構36（第7図）

V区K5b1に位置する。径42～47cmの柱穴状の遺構である。

遺構37（第7図）

V区K5b1の北東隅に位置する。径47cm程の、円形を呈する柱穴状の遺構である。

遺構38（第7図）

V区K5b1に位置する。溝状遺構39と重複しているが、径43cm程の柱穴状遺構になるものと考えられる。遺構39（第7図）

V区K5b1に位置する。幅20～25cmの溝状の遺構である。住居址の周溝でないかとも考えられたが、近接するK5c3でそれらしき遺構を何も検出できおらず、また遺物の出土も両方のグリッドを合わせてもわざかであるため、溝状遺構とした。

遺構40（第8図）

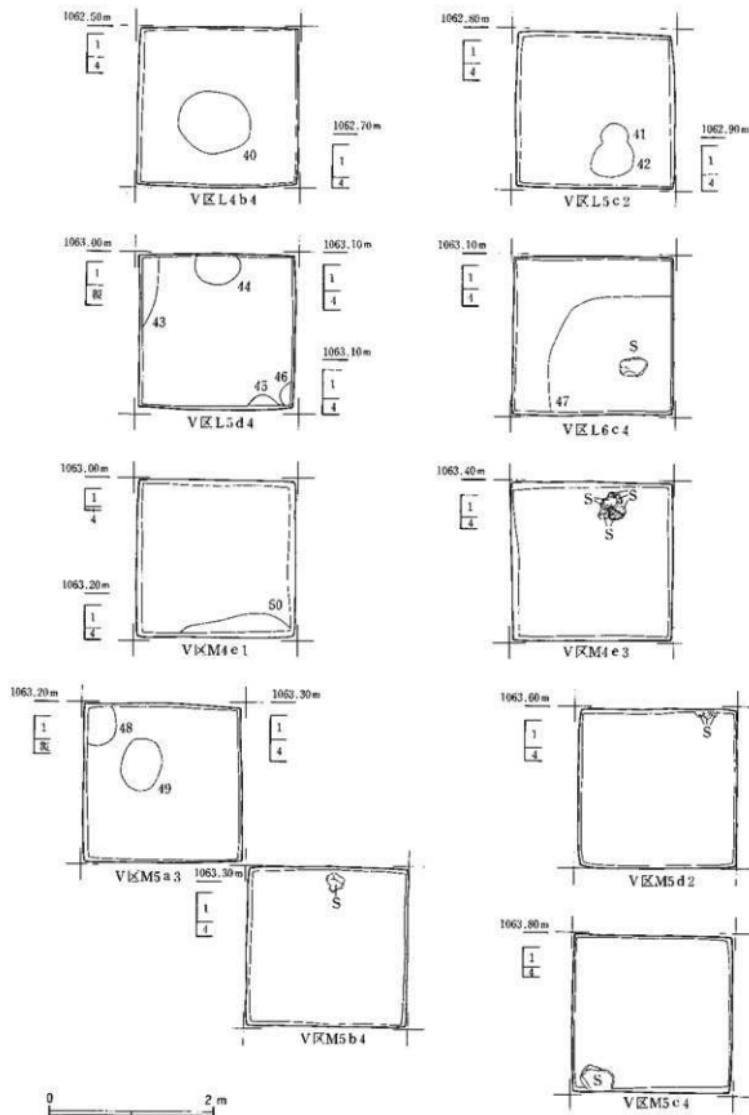
V区L4b4に位置する。長径90cm、短径75cmの長円形を呈する土坑状の遺構である。

遺構41・42（第8図）

V区L5c2に位置する。ダルマの様に括れており、2基の遺構の重複と考えられる。北側の遺構41は径30cm、南側の遺構42は径50cmで、どちらも柱穴状の遺構である。

遺構43（第8図）

V区L5d4の北西隅で検出された。平面形態や規模は明らかでないが、近接するL5b4、L5c2で本遺構の痕跡が確認できないことから、住居址の様な大きな遺構にはならないものと思われる。



第8図 検出された遺構と土層堆積状態(4) (1/60)

遺構44（第8図）

V区L5d4の北壁際で検出された。径55cm程の、柱穴状の遺構になるものと考えられる。

遺構45（第8図）

V区L5d4の南東隅で検出された。平面形態や規模は明らかにできないが、柱穴状の遺構になるものと考えられる。

遺構46（第8図）

V区L5d4の南東隅で検出された。平面形態や規模は明らかでないが、柱穴状の遺構になるものと考えられる。

遺構47（第8図、図版3-3）

V区L6c4の南西隅に位置する。隅丸方形ないし隅丸長方形を呈するものと考えられるが、規模は明らかでない。一応住居址と考えているが、大型の土坑となる可能性もある。確認面で径35cm程の礫が出土している。

本址のあるV区L6c4は、宮坂英氏の調査した6号住居址と位置的に重複するはずであるが、調査された痕跡はなかった。おそらく、古い図面と重ねあわせる作業の中で、どちらかにずれているのであろうが、確認できていない。

遺物はグリッド全体で、縄文土器片が22点出土している。土器の時期は曾利II~IIIである（第9図48-50）。

遺構48（第8図）

V区M5a3の北西隅で検出された。平面形態や規模は明らかでないが、柱穴状の遺構になるものと考えられる。

遺構49（第8図）

V区M5a3に位置する。長径63cm、短径47cmの長円形を呈する柱穴状の遺構である。

遺構50（第8図）

V区M4e3の南壁際で検出された。平面形態や規模は明らかにできなかったが、北壁の湾曲の仕方から住居址にはならず、大きな土坑になるものと考えられる。

遺構51（第11図、図版4-1）

V区M7a1の南側に位置する。当初北に隣接するM6a5を掘り下げており、南側に繋がる住居址になるのではないかと考えられたため、続けて南側のM7a1を掘り下げた。住居址の根土になるのではないかと考えられた黒褐色土の土層は、次第に南に後退していき、南側に一部認められるだけとなってしまったが、住居址としてよいものと考えられる。このV区M6a5、M7a1は宮坂英氏の調査した21号住居址と位置的に重複している。しかし、一度掘り下げた土とは考えられない土層の堆積状態であり、どちらかの方向にずれているものと考えられるが、今回の調査では確認できていない。

遺物は両方のグリッドを合わせて、縄文土器片が89点、黒曜石片が4点と、他のグリッドよりも出土量が多い。しかし、どれも小破片で、遺構の時期を明らかにできるものはなかった。やはり曾利II~III頃であろうか。

遺構52（第11図）

V区N4c3の南西隅に位置する。径43~52cmの横円形を呈する柱穴状の遺構である。

遺構53（第11図）

V区N4e3の東壁際に位置する。平面形態や規模は明らかにできないが、住居址になるものと考えられる。

遺構54（第11図）

V区N5c5の南西隅に位置する。遺跡の中央を東西に走る道に掛っているため、平面形態や規模、時期を明らかにすることはできなかったが、住居址になるものと考えられる。

遺構55（第11図）

V区N 5e1で周溝と一括土器、N 5e3で一括土器が検出されたことにより、住居址であることが確認された。周溝の北側には柱穴状の遺構56~60がある。このため床面にまで達しても遺構と遺構外の土層の区別がつきにくく、周溝にまで至ってしまった。グリッドの壁面を観察しても土層の区別ができない。

本址の時期は、出土している土器（第9図54~60、第10図61~70）から曾利IIIの時期であると考えられる。

遺構56（第11図）

V区N 5e1に位置する。径65~70cmの円形を呈する柱穴状の遺構である。遺構55の住居址の周溝、遺構57と重複する。

遺構57~60（第11図）

V区N 5e1に位置する。重複が激しく、遺構の平面形態や規模を明らかにできないが、いずれも柱穴状の遺構になるものと考えられる。覆土からは新旧関係を明らかにすることはできない。

遺構61（第11図、図版4-2）

V区O 4b4の南西隅に位置する。平面形態や規模は明らかでないが、隅丸方形ないし隅丸長方形になるものと思われる。近接するN 4e3、N 5e1で本遺構の痕跡が認められないことから、住居址の様な大きな遺構にはならないものと考えられる。

遺構62（第11図）

V区O 5c2に位置する。径37~45cm程の、長円形を呈する柱穴状の遺構である。

遺構63（第11図）

V区O 5c4の西壁際に位置する。長径73cm程の長円形を呈する土坑状の遺構である。

遺構64（第11図）

V区O 5c4の東壁際に位置する。径30cm程の、柱穴状の遺構である。

遺構65（第12図）

V区P 5b3に位置する。北壁際で一部プランが未確認のところがあるが、長径140cm、短径100cm程の長円形の土坑になるものと考えられる。

遺構66~70（第12図）

遺構65と同じV区P 5b3に位置する。いずれも柱穴状の遺構になると思われる。

遺構71（第12図、図版4-3）

V区P 5e1の東側に位置する。平面形態や規模は明らかでないが、径6mほどの住居址になるのではないかと考えられる。

遺物は、遺構外も含め、縄文土器片が32点、黒曜石片が10点、黒曜石製ビエス・エスキーユ1点、黒曜石製の使用痕のある剝片が4点出土している。縄文土器片の中には、固化できなかったものの、X字状の把手なども出土している。時期は曾利III~IVになろうか。

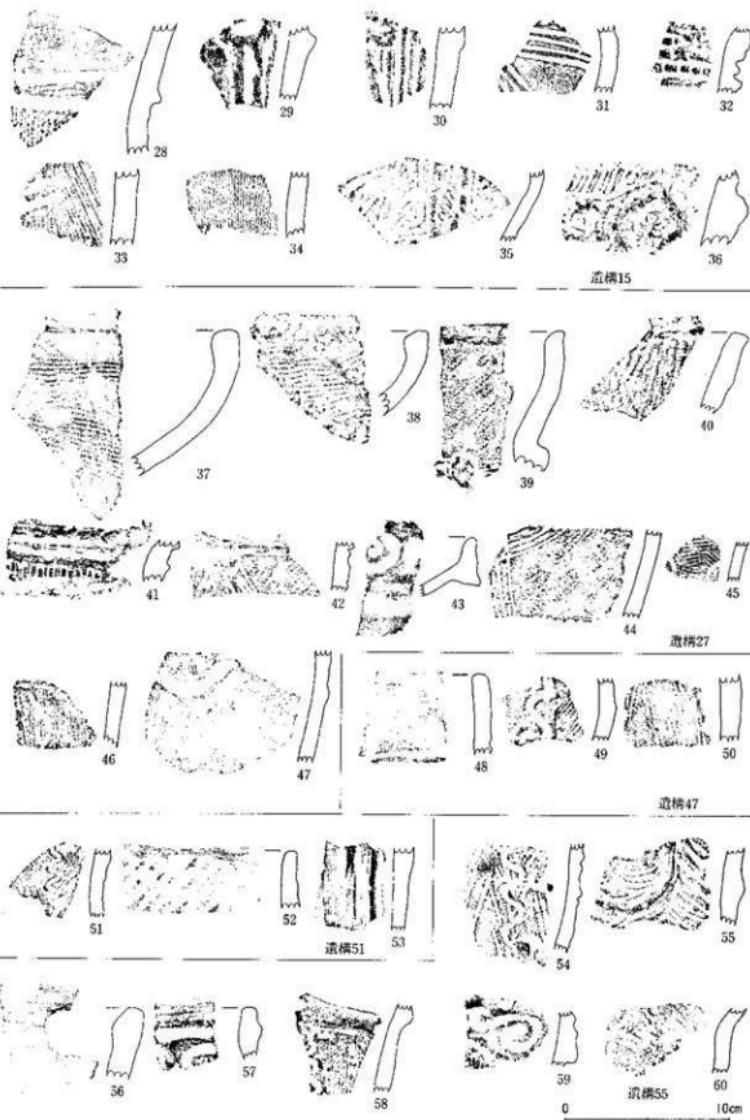
遺構72（第12図、図版4-3）

V区P 5e1の北西隅に位置する。平面形態や規模は明らかでないが、柱穴状の遺構になるのではないかと考えられる。

遺構73（第12図、図版4-3）

V区P 5e1の西壁際に位置する。径25cm程の、柱穴状の遺構である。

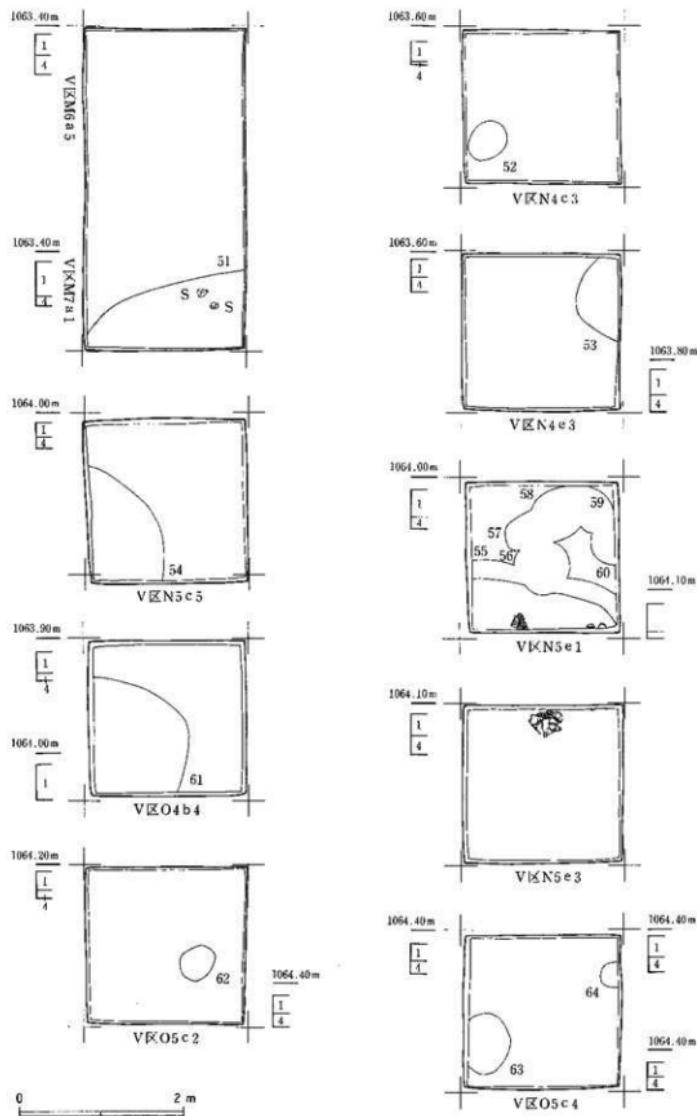
遺構74~76（第12図）



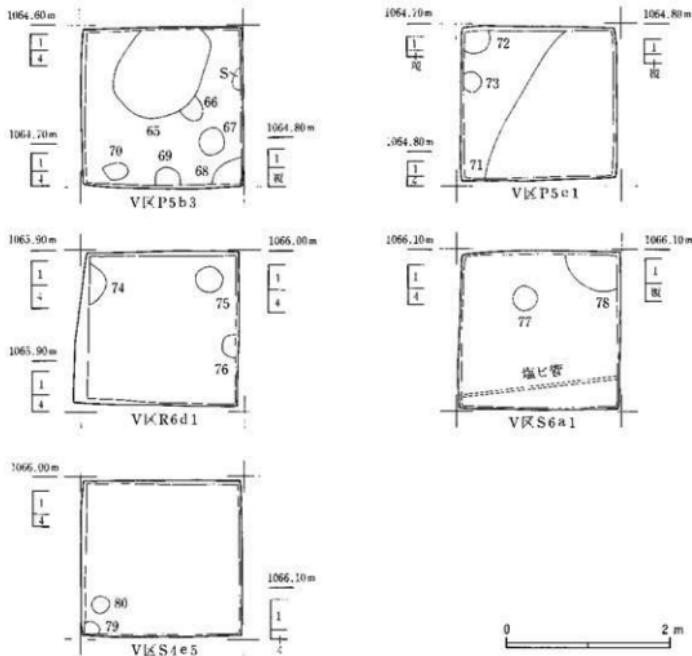
第9図 出土上器(3) (1/3)



第10図 出土土器(4) (1/3)



第11図 検出された造構と土層堆積状態(5) (1/60)



第12図 検出された遺構と土層堆積状態(6) (1/60)

V区R6d1に位置する。いずれも柱穴状の遺構になると思われる。

遺構77（第12図）

V区S6a1に位置する。径30cm程の円形を呈する、柱穴状の遺構である。

遺構78（第12図）

V区S6a1の北西に位置する。平面形態や規模は明らかでないが、土坑状の遺構になるものとかんがえられる。

遺構79、80（第12図）

V区S4e5に位置する。どちらも柱穴状の遺構になると思われる。

埋没状況の調査

前述したように、本年度の調査は宮坂氏がかつて調査した地区的周辺であるが、史跡整備に伴い、旧地形を把握するための他、調査したまま塹地になっている住居址を埋めた後に盛土する計画があるため、3軒の住居址について、約50年間にどの様に住居址が埋没したかの調査を行った。以下はその記録である。

また、住居址の埋没状況をみるほか、尖石考古館から与助尾根地区を見学するための園路があるが、その園路が雨などによりローム層を深く削ってしまっているため、盛土を行うにあたり、旧地形を把握する必要があり、合わせて調査を行った。

なお、遺構番号については、報告書の名称をそのまま用いる。

19号住居址埋没状況（第13図、岡版1-3）

住居址の中央で床面から15cmの堆積を示すだけである。周辺の落ち葉や枯れ枝の他、ゴミなどを燃やしたため、炭の他に空き缶なども混じっている。毎年数万人が訪れ、この周辺を散策している割に、埋まつた土は柔らかく、締まった感じはない。

遺構81（第13図）

V区S7b3・4に位置する。かつて宮坂英次氏が調査した与助尾根遺跡の19号住居址の埋没状況を把握するため、トレンチ調査を行ったところ、その北西側で新しく未発掘ではないかと思われる住居址を確認した。遺構の時期を明らかにするため、トレンチの範囲内を掘り下げたところ、周溝と石匂が検出した。

現在の地表面から床面までは、6層に分類される。1層は現在の表土層である。暗褐色土で、ローム粒子を少量含む。2層は暗褐色土で、ローム粒子や炭化物を含む。これら1・2層は本址の南西に位置する20号住居址の覆土を掘り上げたものではないかと考えられる。3層は黒褐色土で、当時の表土層を掘り上げたものであろうか。4層は暗褐色土である。本層は東に位置する18号住居址、または19号住居址の覆土を掘り上げたものと考えられる。5層は黒褐色土で、当時の表土層ではないかと考えられる。6層が本址の覆土で、暗褐色土の單一層である。ローム粒子を含む。

床面上から一括土器（第10図72）が出土している。曾利III～IVの時期になろうか。

本遺構は、既に調査されている20号住居址と重複しているのではないかと考えられるが、報文にその記述はない。20号住居址の調査時に粘土等の検出がなかったとすると、本址の方が古いことになる。これについては、宮坂氏と共に発掘調査をされた林賀氏に現地に来て頂き、ご教示を得ることができた。それによると、当時の発掘調査は、ボーリングステッキで炉石を発見し、そこを中心に床を掘り出してから壁に向かって掘っていく作業を行っているため、周辺にはまだ未発見の住居址が存在する可能性が充分あるとのことであった。そして、この遺構が当時未確認の住居址であることも確認できた。

なお、石匂の礫は抜かれておらず、完全なままの状態で検出されている。

23号住居址埋没状況（第14図）

堆積状態の最も浅いところでは、覆土は7cm程しかない。周溝の堆積状態は住居址中央とほとんど変わりではなく、通常の発掘調査にみられる三角堆土、逆三角堆土といった堆積状態を示さない。これは発掘調査の時に周辺に盛り上げた土がそのまま流れ込んで来たためと考えられる。この堆積状態は柱穴も同様である。中央の炉址の覆土が周辺と異なり、炭が多く出土するのは、ゴミなどを燃やしたためであろうか。

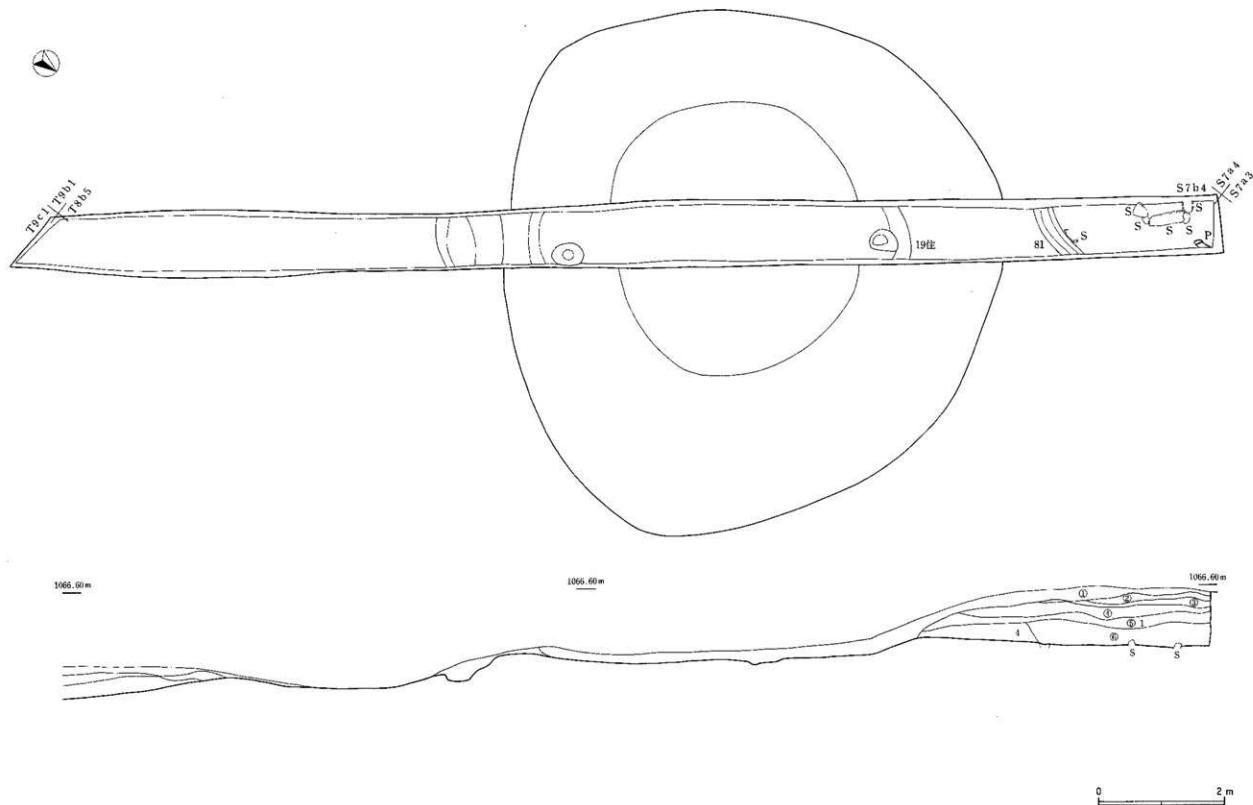
26号住居址埋没状況（第14図）

本址は、最も浅い埋没状態を示すところでも20cm以上有り、周辺の住居址に比してかなり遺構の埋没が進んでいる。調査当時、間に直に迫った古代文化大学講座の開講準備のため、調査半ばにして掘り下げを終了したとのことであるので、当時、埋め戻しを行った可能性もある。炉址内にみられる礫も、出土状態が不自然で、投げ込まれたかの様である。本址の床面から凹石1点が出土している。

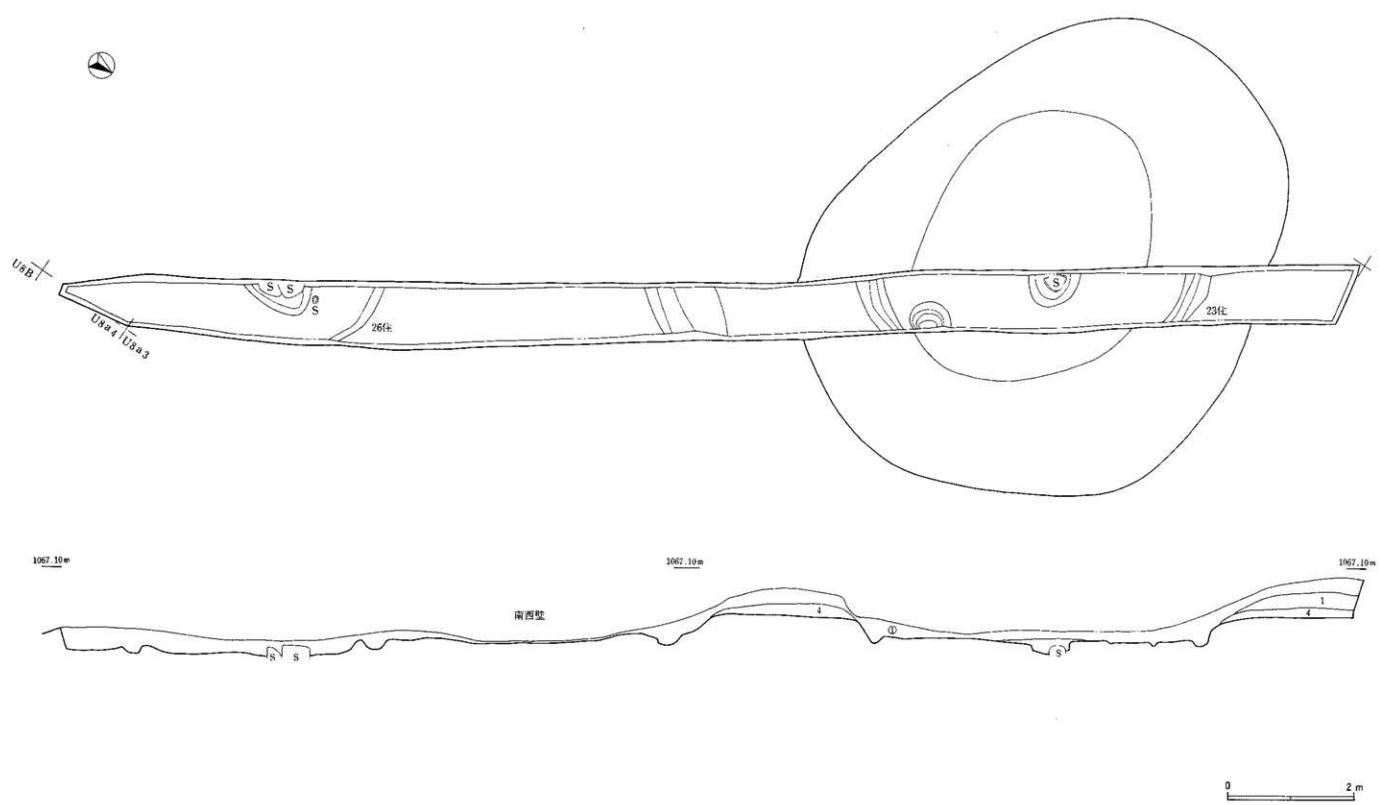
第4章 まとめ

遺構の検出について

今回の確認調査は、史跡整備の事前調査として、植栽の位置や与助尾根遺跡の遺構が、従来宮坂英次氏の



第13図 棚出された遺構と土層堆積状態(7) (1/60)



第14図 検出された遺構と土層堆積状態(8) (1/60)

言うように尾根の南側で終わっており、北側には土坑などの遺構が分布するだけなのかどうかを再確認することを目的としている。戦後まもなく宮坂英式氏を中心に調査された住居址は、炉址や柱穴も含めて埋め戻しを行うことなくそのままおかれため、自然に埋没した状態となっていた。調査した住居址が、50年という年月を、そのままおかれられた例はかつてなく、どの様に埋没しているのか、その過程を把握することも、調査の目的の一つとした。

遺跡の北側は、今までに確認されている遺構の分布状況から、環状を呈するのではないかと予測していた。しかし、北側で検出した住居址は3軒だけであった。環状と言うにはやや少ないが、北東に開く馬蹄形に近い形となっている。

一方、南側の斜面では、かつて宮坂英式氏が調査をしていない一筆を中心に、予定よりも詳細な調査を行い、新発見の住居址3軒を始め、多くの遺構を検出できた。また、南西隅の調査区では遺構が確認されず、既に調査が行われている3・4号住居址が遺構分布の西端であることを確認することができた。

また、調査の過程で、すでに調査されている住居址の周辺からも未発掘の住居址が検出され始めたため、新たに調査区を設定して遺構の検出に努めたが、その全貌を掴めないまま調査を終了したのは残念であった。

検出した遺構には、宮坂氏の確認した住居址と位置がずれているものがかなり見受けられる。これは当時平板測量を行ったものを、現在確認されている落ち込みとの位置関係で重ねたために生じた誤差と考えられるが、検出された遺構から誤差を修正できるまでの資料がそろっていない。

遺構の埋没状況について

概して住居址の埋没状況は、約50年という年月を経過したとは思えないほどの浅い堆積しか示していないかった。与助尾根地区の史跡公園は、年間3万人を超える尖石考古館への来館者の多くが同時に訪れていると考えられる。そうした見学者によって、復元家屋の中だけでなく、掘り凹められた住居址にも立ち入られ、踏み固められていることを考慮しても、土砂の流入と堆積は余りにも少ないと言える。

園路削平状況について

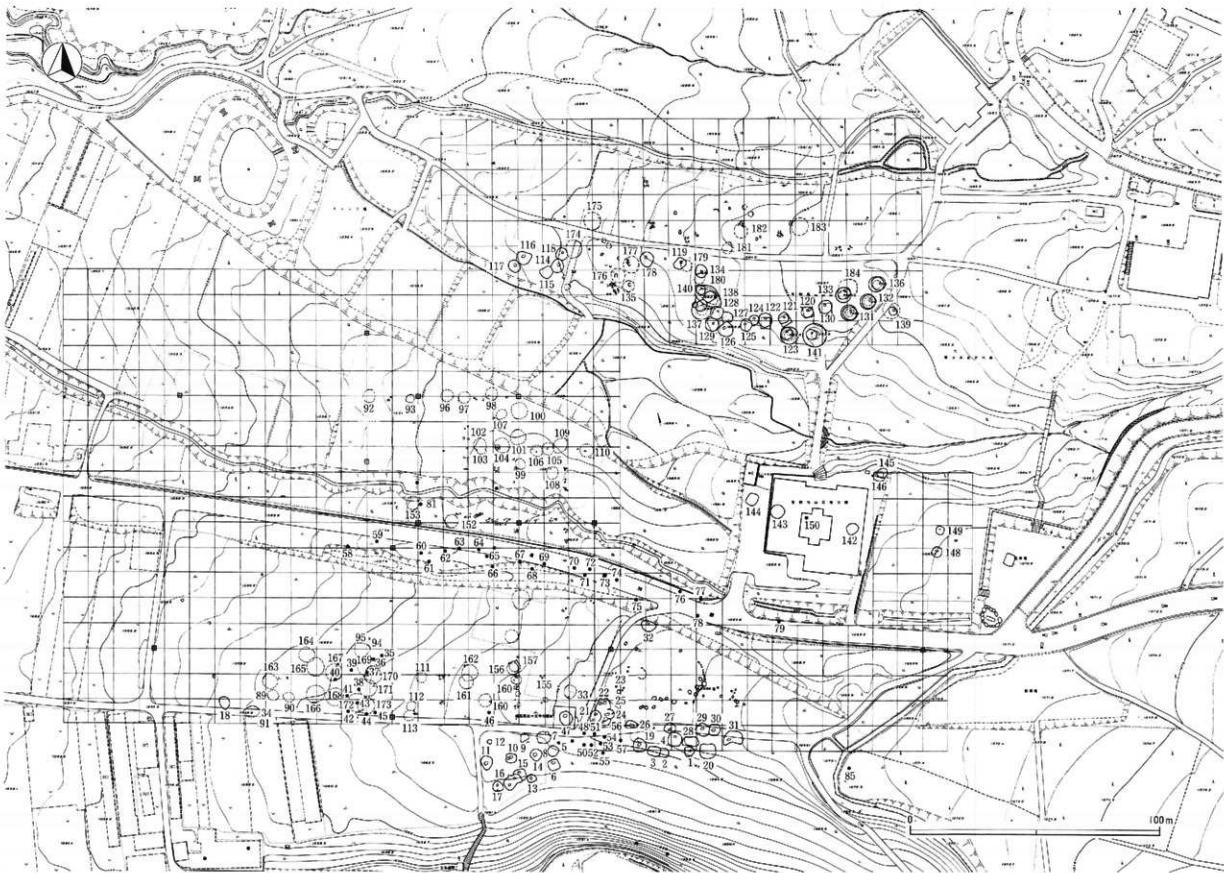
与助尾根地区には、昭和24年から縄文家屋が復元され整備されて来たが、それに伴う見学路もあわせて整備された。園路は尖石考古館と与助尾根地区の間にある谷に土を埋めて通路をわたし、与助尾根地区についてはロームを削平することによって、傾斜をなだらかにしている。この園路が、雨などによりさらに削平されてきている。トレーニングによりその削平の深さをみると、北東のトレーニングが旧地表面と考えられる面から約50cm、南西のトレーニングが54cmである。

与助尾根地区の地形と集落の立地

今回の試掘調査で、遺構の分布の西端はほぼ明かとなったが、東について見ると、尖石地区と与助尾根地区の間にある谷は、東に上るにしたがって浅くなり、約100mで同一台地となる。その谷に向かって直交するように与助尾根地区から浅い谷が延びており、括れた状態になっている。また、北側にも同様に北へ延びる浅い谷が見られるため、東にある茅野市青少年自然の森のあるところから、西に向かって尾根の頂部に幅の狭い連結部分を持ちながら、与助尾根地区に繋がっていることが理解され、再び広くなったところに集落が営まれている。与助尾根地区は、やはり既に調査が行われている26号住居址が、遺構分布の東端になるのではないかと考えられる。

第1表 尖石遺跡周辺住居址の時代・時期

No	遺跡名	遺構	番号	時 期	調査年・場所	No	遺跡名	遺構	番号	時 期	調査年・場所
1	尖石	住居址	1	晩古JIV	S15-4	93	尖石	住居址	2	新武	H3-9
2		住居址	2	晩古JII	S15-5	94		遺構	3	竹原町中	H3-9
3		住居址	3	晩古JII	S15-6	95		遺構	4	中野内	H3-9
4		住居址	4	晩古V	S15-7	96		住居址	5	藤内	H3-9
5		住居址	5	晩古IV	S15-7	97		住居址	6	藤内日	H3-9
6		住居址	6	晩古II?	S15-7	98		住居址	3	不明	H3-9
7		住居址	7	晩古II	S15-7	99		住居址	4	不明	H3-9
8		住居址	8	晩古II(III)	S15-8	100		住居址	5	藤内日	H3-9
9		住居址	9	晩古II	S15-8	101		住居址	6	晩古II	H3-9
10		住居址	10	晩古II(III)	S15-8	102		住居址	7	藤内日 - II	H3-9
11		住居址	11	晩古II	S15-8	103		住居址	8	藤内日 - II	H3-9
12		住居址	12	晩古II	S15-9	104		住居址	9	晩古II	H3-9
13		住居址	13	晩古II	S15-10	105		住居址	10	晩古II	H3-9
14		住居址	14	晩古IV	S15-10-11	106		住居址	11	井ノ原 - II	H3-9
15		住居址	15	晩古IV	S15-10-11	107		住居址	12	藤内I	H3-9
16		住居址	16	晩古IV	S15-10-11	108		住居址	13	不明	H3-9
17		住居址	17	晩古IV	S15-5-6	109		住居址	14	藤内I	H3-9
18		住居址	18	晩古IV	S15-5-6	110		住居址	15	晩古IV	H3-9
19		住居址	19	晩古IV	S15-6	111		住居址	16	小原	H3-9
20		住居址	20	晩古IV	S15-6-7	112		住居址	17	中野後半	H3-9
21		住居址	21	晩古IV	S15-7	113		住居址	18	不明	H3-9
22		住居址	22	不明	S17-4-5	114	与 効 須	根	1	晩古II(Ⅲ)	S21-10
23		住居址	23	晩古II	S17-4-5	115		住居址	2	九兵衛根根	S21-11
24		住居址	24	不明	S17-5	116		住居址	3	不明	S22-4
25		住居址	25	晩古II	S17-5	117		住居址	4	晩古IV	S22-4-5
26		住居址	26	晩古II	S17-5	118		住居址	5	不明	S22-5-9
27		住居址	27	晩古II	S17-5	119		住居址	6	晩古II	S22-10
28		住居址	28	晩古II	S17-5	120		住居址	7	晩古II	S22-4-5
29		住居址	29	晩古II	S17-5	121		住居址	8	晩古II	S24-5
30		住居址	30	晩古II	S17-9	122		住居址	9	晩古II	S24-6
31		住居址	31	晩古II	S17-9-10	123		住居址	10	晩古II	S24-6
32		住居址	32	晩古後半	S17-9	124		住居址	11	晩古IV	S24-7
33		住居址	33	晩古II	S29-1	125		住居址	12	晩古II	S24-7
34		住居址	34	中期I中期II	S29-1	126		住居址	13	晩古II	S24-7
35		炉	35	炉	S29-2506地盤I	127		住居址	14	晩古II	S24-8
36		炉	36	炉	S29-2506地盤II	128		住居址	15	晩古II	S24-10
37		炉	37	炉	S29-2506地盤III	129		住居址	16	晩古II	S24-10
38		炉	38	炉	S29-2506地盤IV	130		住居址	17	晩古II	S25-4
39		炉	39	炉	S29-2506地盤V	131		住居址	18	晩古II	S25-4
40		炉	40	炉	S29-2506地盤VI	132		住居址	19	晩古後半	S25-4
41		炉	41	炉	S29-2506地盤VII	133		住居址	20	晩古II	S25-4
42		炉	42	炉	S29-2506地盤VIII	134		住居址	21	中野子	S25-10
43		炉	43	炉	S29-2506地盤IX	135		住居址	22	小原	S25-10
44		炉	44	炉	S29-2506地盤X	136		住居址	23	晩古II	S25-10
45		炉	45	炉	S29-2506地盤Y	137		住居址	24	不明	S25-7
46		炉	46	炉	S29-2506地盤Z	138		住居址	25	晩古II	S27-6
47		炉	47	炉	S29-1	139		住居址	26	晩古II	S27-6
48		炉	48	炉	S29-2	140		住居址	27	晩古II	S27-6
49		炉	49	炉	S29-3	141		住居址	28	晩古II	S27-6
50		炉	50	炉	S29-4	142		住居址	29	晩古II	S33
51		炉	51	炉	S29-5	143		住居址	30	晩古II	S33
52		炉	52	炉	S29-6	144		住居址	31	晩古II	S33
53		炉	53	炉	S29-6.5	145		住居址	4	晩古II	S53
54		炉	54	炉	S29-7	146		住居址	5	前期前葉森II木	S53
55		炉	55	炉	S29-8	147		住居址	6	平安	H12-12
56		炉	56	炉	S29-8.5	148		住居址	7	晩古II	H15-5
57		炉	57	炉	S29-9	149		住居址	8	中野山	H15-5
58		炉	58	炉	S29-9.5	150		住居址	9	井ノ原	S25
59		炉	59	炉	S29-10	151		住居址	10	晩古II	S25-12
60		炉	60	炉	S29-11	152		住居址	68	中野山	H16-9
61		炉	61	炉	S29-11.5	153		住居址	71	中野山	H16-9
62		炉	62	炉	S29-12	154		住居址	4	II-9	H17-9
63		炉	63	炉	S29-12.5	155		住居址	35	晩古II	H17-9
64		炉	64	炉	S29-13	156		住居址	36	晩古II	H17-9
65		炉	65	炉	S29-14	157		住居址	37	晩古II	H17-9
66		炉	66	炉	S29-14.5	158		住居址	42	藤内	H17-9
67		炉	67	炉	S29-15	159		住居址	43	藤内	H17-9
68		炉	68	炉	S29-15.5	160		住居址	1	晩古II	H18-10
69		炉	69	炉	S29-16	161		住居址	69	中野山	H18-10
70		炉	70	炉	S29-16.5	162		住居址	71	中野山	H18-10
71		炉	71	炉	S29-17	163		住居址	4	II-9	H18-10
72		炉	72	炉	S29-17.5	164		住居址	35	晩古II	H18-10
73		炉	73	炉	S29-18	165		住居址	36	晩古II	H18-10
74		炉	74	炉	S29-18.5	166		住居址	37	晩古II	H18-10
75		炉	75	炉	S29-19	167		住居址	42	藤内	H18-10
76		炉	76	炉	S29-19.5	168		住居址	43	藤内	H18-10
77		炉	77	炉	S29-20	169		住居址	14	藤内	H18-10
78		炉	78	炉	S29-20.5	170		住居址	15	晩古II	H18-10
79		炉	79	炉	S29-21	171		住居址	16	II-10	H18-10
80		炉	80	炉	S29-21.5	172		住居址	17	II-10	H18-10
81		炉	81	炉	S29-22	173		住居址	18	晩古II-V, 晩古II-ⅢⅣ	H18-10
82		炉	82	炉	S29-22.5	174		住居址	19	晩古II	H18-11
83		炉	83	炉	S29-23	175		住居址	20	晩古II	H18-11
84		炉	84	炉	S29-23.5	176		住居址	21	晩古II	H18-11
85		炉	85	炉	S29-24	177		住居址	22	晩古II	H18-11
86		炉	86	炉	S29-24.5	178		住居址	23	晩古II	H18-11
87		炉	87	炉	S29-25	179		住居址	24	晩古II	H18-11
88		炉	88	炉	S29-25.5	180		住居址	25	晩古II	H18-11
89		炉	89	炉	S29-26	181		住居址	26	晩古II	H18-11
90		炉	90	炉	S29-26.5	182		住居址	27	晩古II	H18-11
91		炉	91	炉	S29-27	183		住居址	28	晩古II	H18-11
92		住居址	1	住居址	H3-9	184		住居址	29	晩古II	H18-11



第15図 造構分布図 (1/1500)

第2表 尖石遺跡出土遺物一覧表(I)

区	グリッド	遺構No	土器片	黒曜石 剝 片	黒曜石 石 鉄	打 石	製 斧	磨 石	剝 片	石 皿	凹 石	チャ ート石	黒曜石ビエス ・エスキュー	黒曜石使用痕 のある剝片
V	D1 a 2		5											
	D1 c 2		1											
	D2 e 1		2											
	D4 e 1							1						
	D5 e 1			1										
	E2 e 1		2											
	F2 e 1	19	1											
	F3 e 1	21												
	F4 e 2	3												
	F4 e 4	1												
	G3 e 1	2												
	G4 e 1	2												
	G4 e 3		2											
	G4 e 5	2												
	H3 e 1	4												
	H4 d 4	8	1											
	H4 e 1	14												
	H5 c 1	164	15		1	1				1		2		
	H6 c 1	8												1
	H6 c 1-2	130	7											
	H7 a 3	12	6											
	H7 b 1	17	3											
	H7 d 4	33	5											
	H7 e 1	4							1					
	I3 e 1	13	1											
	I4 a 4	17												
	I4 b 2	3						2						
	I4 d 3	14												
	I4 e 1	1						1						
	I5 a 1	134	6											
	I5 a 1-2	75	12					2						
	I5 a 2	12												
	I5 b 2	4												
	I5 b 5	3												
	I5 c 5	34	2											
	I5 e 1	8												
	I6 a 4	12												
	I6 b 2	4												
	I6 b 4	10												
	I6 c 2	35	4											
	I6 d 1	10												
	I6 d 5	1												
	I6 e 1	26												
	I7 b 3	21												
	I7 d 3	26												
	I7 d 5	9	1							1				
	I7 e 1	34	1		1									
	I7 e 4	9	1						1					
	J3 b 2	20												
	J3 c 1	7	2					1						
	J4 a 3	6												
	J4 b 5	5												
	J4 c 3	6												
	J4 d 4	2												
	J4 e 1	4												
	J5 b 2	5												
	J5 e 1	7												
	J5 e 3	1												
	J6 e 1	5												
	J6 b 2	41	13										2	
	J6 b 4	42	3										1	
	J6 e 2	11												
	J7 b 2	6	2											
	J7 b 2-3	35	6	2										
	K3 a 3	32	8	1	1				2					
	K3 b 5	1												
	K3 d 3	6												
	K4 a 3	3												
	K4 c 4	2												
	K4 e 2	8												

第2表 尖石遺跡出土遺物一覧表(2)

区	グリッド	遺構No.	土器片	黒曜石 剣 片	黒曜石 石 頭	打 石 斧	磨 石	刺 片	石 劍	凹 石	チャ ー ト 石 鏡	黒曜石ビエス ・エスキュー	黒曜石使用痕 のある剣片
V	K 5 b 1		12	1									
	K 5 c 3		2										
	K 5 e 1		7										
	K 5 e 3		1										
	K 6 e 2		3										
	L 4 b 4		1										
	L 4 d 4		6										
	L 4 e 1		5										
	L 5 b 4		6	1									
	L 5 c 2		5			1							
	L 5 d 4		17	1									
	L 5 e 1		6										
	L 6 c 2		24										
	L 6 c 4		22										
	M 3 e 1		17	1									
	M 4 b 5		9				1						
	M 4 e 1		28										
	M 4 e 3		37	2			3			1			
	M 5 a 3		3										
	M 5 b 4		2										
	M 5 d 2		21	7						1			
	M 5 e 4		12	2									
	M 6 a 3		16										
	M 6 a 5		14	1									
	M 6 d 3		15	1									
	M6a5.M7a1		89	4									
	M 7 a 1		2										
	M 7 d 1		8										
	N 4 c 3		4										
	N 4 e 3		1										
	N 5 a 1		17										
	N 5 c 3		4	3									
	N 5 c 5		18	1								1	
	N 5 e 1		17	9	1								
	N 5 e 3		107	14	1							2	
	N 6 a 4		7				1						
	O 4 b 4		4										
	O 4 c 5		3										
	O 5 a 5		6	2									
	O 5 c 2		12	1									
	O 5 c 4		6										
	O 5 e 4		14	3								2	
	O 6 c 1		1	1	1								
	P 4 b 4		1	1									
	P 4 b 3		2										
	P 4 c 4		18	1									
	P 4 e 1		13										
	P 4 c 2		6										
	P 5 a 1		4	1		1		1					1
	P 5 b 3		11	1									
	P 5 c 5		2										
	P 5 e 1		32	10							1	4	
	P 5 e 4		2										
	R 5 d 1		59	7								3	
	R 5 e 3		35	4									
	R 6 d 1		19	2									
	S 3 e 5		1										
	S 4 c 4		8								1		
	S 4 e 5		5										
	S 5 b 3		4			1							
	S 5 d 2		13										
	S 6 a 1		13										
	S 6 e 1		3										
	T 5 a 4		14										
	T 5 d 1		6										
	U 5 e 1		1										
	北T東									1			
	北T西			5									
	南T		10	1								1	
	合計	2,119	187	6	7	8	8	2	4	1	4	18	



1 <V区>風景(東から)

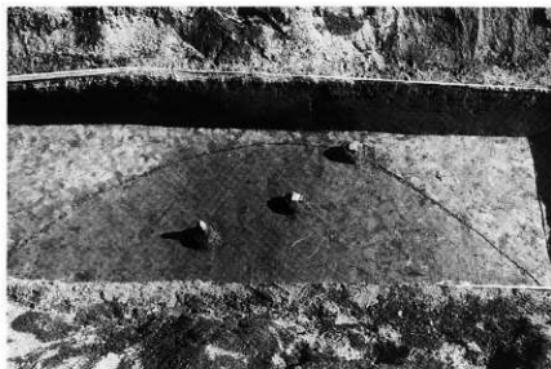


2 <V区>風景(東から)



3 <V区>南トレンチ(東から)

図版 2



1 遺構 1 <V区H5e5・H6e1・2>
(西から)



2 遺構 7 <V区I5a1> (北から)



3 遺構14 <V区I7e1> 石圓が
検出状態(北から)



1 遺構15(V区)J 6b4・5(南から)



2 遺構27(V区)J 7b2・3(南から)



3 遺構47(V区)L 6c4(南から)

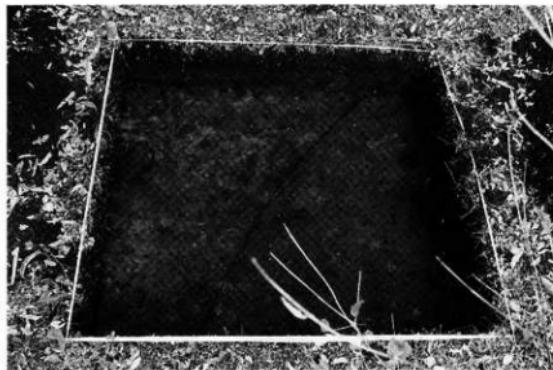
図版 4



1 造構51<V区M 7 a 1>(北から)



2 造構61<V区O 4 b 4>(北から)



3 造構71~73<V区P 5 e 1>(南から)

報告書抄録

ふりがな	とくべつしせきとがりいしいせき							
書名	特別史跡尖石遺跡							
副書名	平成10年度記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小林 深志							
編集機関	茅野市教育委員会文化財課							
所在地	〒391-8501 長野県茅野市塚原二丁目6番1号 TEL 0266-72-2101							
発行年月日	西暦1999年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とくべつしせき 尖石遺跡 与助尾根地 区	茅野市豊平 東嶽 4,734-3,423 他	20214	85	36° 0' 36"	138° 6' 40"	平成10年 9月17日 12月25日	676m ²	記念物保存修 理事事業（環境 整備）に係る 試掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項			
とくべつしせき 尖石遺跡 与助尾根地 区	集落跡	縄文時代 中期	住居址 11基 土坑・ピット 71基	縄文土器 2119点 石 器 245点	今まで尾根の南側 斜面にだけ分布して いた住居址が、 北側斜面にまで及 んでおり、環状な いし馬蹄形を呈す ることが確認され た。			

特別史跡 尖石遺跡

——平成11年度記念物保存修理事業
(環境整備)に係る試掘調査報告書——

平成11年3月20日 印刷

平成11年3月26日 発行

編集 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号
発行 茅野市教育委員会
印刷 ほおづき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5
